

健康文化

## ヤドカリと人は家で苦勞する

高田 健三

家と言うものは三軒目を建ててみて、やっと自分に気に入ったものが出ると言ったようなことを昔聞いたことがある。しかし、いくら昔の”お大尽”でも、気に入らないからと自分一代の間に三度も家を建て替えられる人は、ざらにいたとは思えない。つまり、自分の思い通りの“住居”というものは、そうそう手に入るものでは無いということであろう。

よく、有名な作家や芸術家の伝記などに、そこが彼の“終の棲家”になったと言った記述を目にすることがある。国内、海外を問わず、旅行するとそういう来歴のある“家”や“部屋”があれば、訪ねてみたくもなる。現場に立つと、あの小説はこの部屋で生まれたのか、あの画家はこのアトリエからあの傑作を世に送り出したのか等と、色々な思いに駆られ、時にはその人達の作品に新たな情感が湧いてくることもある。一方で、私などはつい、家の造りや部屋の間取りなどを見ていると、彼はこの住屋を気に入っていたのであろうかとか、それとも仮の住まいが、たまたまそこで一生を終わることになったのだろうかとか別の感慨が湧いてくることもある。

長い人生のことである。仕事に精を出し歳を重ねるにつれ、個人の趣味嗜好等も変化し、家族のライフスタイルも変わるであろう。そうすればそれに合った生活空間が欲しくもなる。よくアパートやマンションをころころ替わる人がいる。気に入らないところがあると、それが我慢できなくなるのか、或いは単なる気分転換のためなのだろうか。何れにしてもある種のエネルギーの持ち主である。一方、先祖代々の家を継いで暮らしている人もいる。文化財的価値のあるものともなると、本人の好き嫌いは入り込む余地などないであろう。これも一つの家と人との関わり合いである。

葛飾北斎は一生のうち九十数回転居したという。天才浮世絵師に何が起こっていたのだろうか。その心の内は知るよしもないが、人が人なるが故に、そこには何か謎めいたものが込められているような気がする。その彼が90才の生涯を閉じたのは、浅草遍照院境内の仮宅であったという。

ヤドカリは成長し身体が大きくなるに従って、身を入れる貝殻（家）を自分

に合ったサイズのものに取り替えてゆく。アパートや賃貸マンションならば、生活の都合などから必要な時には住み替えも容易であろう。しかし、持ち家となるとおいそれとは行かない。建て直す（買い換える）には小金ではすまない。あまり早くに自分の家をもってしまうと、先々生活の自由度を縛りかねない。やはり我が家を建てる（買う）となると熟慮を要するところである。

人はいつ頃になれば自分の“家”を持ちたいと思うようになるのだろうか。私自身を振り返ってみると、名古屋での学生時代から研究室に勤め始めた頃は、両親の家に一緒に住んでいた。東京の我が家が戦災で焼けてから、両親は名古屋にある嘗ての祖父母の家に転居していた。結婚してから暫くして、思いもかけず抽選に当たった公団住宅に移り住んだ。大規模住宅棟が林立する中で、新築の私たちの棟は、公団自慢の各階2世帯5階建ての3LDKであった。世帯の独立性が高く、60年代初め頃のサラリーマンの間で人気があるスマートなスタイルであった。そんなこともあって、興味津々で“団地生活”なるものを経験することになった。けっこう楽しめた反面、学生寮等とは違った人間社会の、集団心理の一端を勉強することが出来たのは、収穫と言うものであろう。

その後、ある事情から岐阜市にある純日本風の住宅に移り住むことになる。和洋折衷の利便性と言っても、矩形を単に直線で仕切っただけの当時の公団住宅の間取りに較べ、お年寄りのために建てたというだけあって、畳敷き広縁を巡らせた客間などなかなかの風格があり、熟年夫婦用の住宅であった。かくして我が家の生活空間は、がらりとレトロ調に変わったのである。

初めのうちは人様の家に客でいるような気がして、落ち着くまでには暫く時間がかかった。人と住居とのマッチングはなかなか難しいものという実感を持ったのはこの頃である。ヤドカリは格好の貝殻（家）となると取り合いになるらしく、一生、転居先の家探しには苦勞するらしい。広い海の中でも自分好みの家を持つことは容易ではないようである。

初めは何となくぎこちなかった家も、住めばそれなりの味わいも出てきて、金華山と長良川を取り込むようにして広がる街の景観にも魅せられ、数年の予定がかれこれ十年近く過ぎてしまった。この間、私の予測を遙かに越えてモータリゼーションが進み、岐阜-名古屋間の国道の渋滞がひどくなり、自動車通勤の利便性が薄らいで来た。丁度その頃、以前から家を予定していた土地の近くに、名古屋市地下鉄の八事駅が開業したのである。研究室に近く、都心や名古屋駅に出るにも便利である。家を建てる条件が整ったと判断してから段取りに取りかかるまでは速かった。初めて自前のプランの家を建てるというわけで、わくわくした気持ちは、今も実感としてのこっている。

私にとって、寝起きするところを住处と考えれば、子供の頃から数えると、現在の家に落ちつくまでに、学生時代の寮や下宿を含めて十一回転居したことになる。北斎の足許には及びもつかないのは勿論のことであるが、普通のサラリーマンの平均ぐらいのところであろうか。戦中戦後の寮や下宿時代の生活は、寝ることが出来れば御の字であり、間取りなどは二の次であった。もちろんプライバシーなどなきに等しい。それらを除けば、それぞれの家の間取り、近所の様子など可成り詳しく記憶に残っている。それに加え親しい友人宅なども参考にして、大体のアイデアが固まったところで、設計事務所と詰めるための下図を引き始めた。しかし、家内と相談しながらセクションペーパー上に間取りなどを展開していると、あれもこれもで大邸宅でも建てるような気持ちになったものである。

建築関係の友人のサゼッションもあり、東海地震など巨大地震の発生確率が高まって来ていることも考慮して、コンクリート建てにした。初めはまあまあの出来映えと思っていたが、それからおよそ二十五年、大改装を二度行って今に至っている。振り返ってみれば昔の人の、三軒目にして云々の話は、満更いい加減な話でもないように思える。しかし今年はや性懲りもなく、中規模改装を計画中である。この分だと、我が家の生活環境はこの先未だ変化をし続けていきそうである。

近頃、家造りや街造りに、行動心理学など人間活動に軸を措いた”建築人間工学”の視点が求められているという（建築人間工学事典：彰國社）。家という”入れ物”造りに凝った時代に比べ、より良き人間生活を支える住空間の実現を目指すものらしい。残念ながら我が家には時既に遅しである。

今の家を建ててから暫くして、岐阜市に独りで暮らしていた家内の母親が、自分の家を畳んで我が家の隣に移ってきた。一人で生活するにも便利なように、基本設備を整えた“離れ”と言った位置関係である。親戚や知人、友人の多い生地を措いても娘の近くが好いらしい。若いうちは気にもならなかった親と子の生活の関わりが身近なものとなった。親と子についての或る調査によると、親世代は出来るだけ子世代の近くに住みたいと思う一方、子世代は親から離れて住みたいと考えるらしい（渋谷昌三：NHKブックス605）。出生率が依然として低下する一方、高齢者は急速に増え続け、今は独立して生計を立てている親世代にも、高齢化は間近に迫っている。親子の住関係をどのように調和させるか、核家族型の生活に馴染んでいる今の人達にも、避けて通れない重要な問題の一つである。

イギリスのシェルドン（'48）は、別個に住む高齢の親を日常的に援助できる

距離の目安を、“スープの冷めない距離”という言葉で表した。高齢化社会の問題を言い得た、古くても新しさを失わない名言である。彼はそれを歩いて約5分以内と考えていたという。当時と今とでは、社会情勢も人の意識にも大きな隔たりがあるとはいえ、今の女性の60パーセント以上が、近所に住むことを“スープの冷めない距離”と考える一方、親は同じ敷地内に住むか同居することを思うらしい（渋谷）。時代を経ても、親子関係の問題は、質的にはあまり変わっていないようである。

街でたまに見かける二世帯住宅というのは、両者間の意識的距離と物理的距離の差を、隔壁を設けることで最小化すると同時に、プライバシーを確保したものである。江戸時代、棟割り長屋に住んでいた人達は、部屋は狭くても人情に厚く、足りないものは互いに助け合って生きていたという。人情の濃さは人と人との距離にも比例するのである。“スープの冷めない距離”に住んでいる親子ほど、行き来する頻度は必然的に高くなるという。一度、二世帯住宅の人に、住み心地を聞いてみたいものである。

近頃、急速に進んだ“ユビキタス社会”とは、あらゆる情報等が“何時でも何処からでも”手に入るような状態をいうらしい。海外にいる人ともテレビ画面上で向き合い、リアルタイムで会議や商談も可能である。しかし、携帯電話で“メル友”は増えても、肉声で語り合い肌の温もりを感じ合える友達は少ない。核家族化も進み、親と子の接触が薄れて来た今の時代、“スープの冷めない距離”というこの言葉は、どのように受け止められるのであろうか。

生前、母は自分の注文で建てた離れで、我が家と“スープの冷めない距離”の関係で過ごしていた。しかし、実際にその日々を楽しんでいただろうかと思うことが時折あった。もしそうであったとすれば、それは私が心に画く“終の棲家”の情景と重なり、何となく気の安らぐ思いがするのである。

その離れには、現在、娘夫婦と孫達が住んでいる。家内と私の歳をあわせると百五十四才になる。百才以上の人が多くなった今の日本では珍しく無いが、人からは高齢者扱いされている。そうとすれば我が家と離れとの間のベクトルは、母が棲んでいた時とは逆になる筈である。しかし今のところ、一向にその気配が見えない。家内は折に触れブツブツこぼしながら世話を焼いている。それも我々がまだ元気な証拠なのかもしれない。本当のところは、“暖かいスープ”の届くその日が来ることのほうが気がかりなことではある。

(名古屋大学名誉教授)